

# 岡本かの子『母と娘』

——密着から自立へ／戦争協力から反戦へ——

近 藤 華 子

はじめに

岡本かの子『母と娘』は、一九三四年五月、交蘭社刊行の雑誌『女性文化』の創刊号に掲載された小品である。第一次世界大戦後のイギリスを舞台に、娘の将来をめぐる母娘の葛藤が描かれている本テキストは、冬樹社版の全集に所収されるまで、いずれの単行本・全集・叢書にも収録されず、管見の限り、研究の俎上に載せられることもなかった。

かの子は、一九二九年一月から一九三二年三月まで西欧を外遊し、帰国後、仏教研究家としての活躍を経て、一九三六年に小説家として文壇にデビューした。かの子文学における西欧外遊の重要性は早い段階から指摘されており、疑いの余地はないだろう。紀行文集『世界に摘む花』を代表とする随筆の数々、短編『ガルスワシーの庭』（初出『行動』一九三四・七）、『母子叙情』（初出『文学界』一九三七・三）、『巴里祭』（初出『文学界』一九三八・七）、『河明り』（初出『中央公論』一九三九・四）、『褐色の求道』（初出誌未詳）が、外遊中の体験から生み出された。本テキストも、外遊土産の一つだが、舞台となる都市がハムステッド、パリ、ベルリンと複数に亘り、それらが

全てかの子の実際の滞在先と一致し、唯一、三都市を比較するまなざしが表れている点で他とは異なる。かの子が後に繰り返し描くことになる〈母と娘〉の姿が最も早く表現された作品としても、等閑に付すことはできない。

本稿では、テキストに描かれた母と娘の関係性を分析し、両者の対立から和解までの心の移り変わりを明らかにすることを目的とする。また母娘関係の隔たりの原因となった娘の戦争に対する意識の転換についても検討したい。

## 一 「自らの延長」としての娘

母娘は「ロンドンの北郊ハムステッド丘」に建つ「小奇麗な別荘風の家」に住む。母のスレイヤはその地域の「No.1の奥さん」である。容貌は「赤毛で赤ら顔で、小肥り」。「勝気」な性格で、「一人娘を育てる傍ら新しい進歩主義を奉ずる婦人団体へ入つて居た」。第一次世界大戦で夫が戦死した後、女手一つで娘を育てながら、婦人団体の活動にも積極的に加わるエネルギーに溢れる女性だ。

一方の娘アグネスも、母に劣らず精力的である。「丈が高く、胸が張つて」「男の子のやうな」容貌で、「活発」だ。女学校時代には

「女軍観兵式」で「級友を率い」、「全校八百の総指揮を鮮やかにやつてのけ」、「英仏伊独等の青年男女を会員とする国際的クラブ」に「入会して居る」。「持つて生まれた統帥力」があるアグネスは、地域の「No. 1の奥さん」で、「婦人団体」で他の女性たちを牽引する母の資質を受け継いでいるようだ。二人は、非常に似通った性格の持ち主である。

さらに母娘は「評判の仲良し」で、「何事をも共同でやつていた」。「いつも」「一緒ににかけて色々の事務を分担し」と、日常の生活から「中古のガタガタ自動車を安く買い求め」、「郊外へ出かける折りなど蓄音器を積み込んで交代に操縦し」、「天幕や食料を分担して勇ましく母娘の小旅行に出かけた」と、余暇までも共に行動する。常に母娘で過ごすという環境が、アグネスに母の性格や価値観を刻み込み、母娘をまるで相似形のようにしたのだろう。二人の関係は、近所の人達から「姉妹か親友」と言われる程、親密だ。

しかし、母娘の絆に亀裂が入る日がやってきた。娘アグネスの将来をめぐり母娘は初めて対立する。娘は女学校に通い始めると「寄宿生活をし」、母親と離れて暮した。「土曜から日曜へかけては家へ帰つて来た」が、共に過ごす時間は極端に減った。卒業後の進路を考えるにあたり、アグネスは「陸軍に關係した勇ましい仕事を見付きたい」と望む。「女でありながら英国陸軍士官に列せられる光榮」を「夢見て」いたのだ。ある日、新聞で「陸軍飛行場で英国婦人にも飛行機の操縦法を練習させる」という募集記事を見付けると、「自分の将来への活路を見出したやうに喜んで」、「早速」、母に「許可を懇願した」。しかし、母は「真正面から反対はしな」いものの、内心では娘の「希望」を拒絶していた。スルイヤは、「娘の性格や

傾向に深い理解を持つ母親」である。それにも拘わらず、「希望」を受け入れられなかったのはなぜなのか。母は「全宇宙に唯一人の頼りにする者、そして自己の延長である娘を危険な仕事につかせる事は堪えられない」とする。娘が進路を決めようとした時、スルイヤ・アグネスの母娘関係が孕む問題が浮き彫りとなったのだ。

母と娘の關係に研究の目が向けられるようになったのは、一九七〇年代以降である。日本でも「一卵性母娘」という呼称が一般化した<sup>5)</sup>が、フェミニズムで主題化されたのは母娘の密着と「母殺し」である。上野千鶴子氏は「これまでは子供の側から「同一化」といつてきたわけですが、今度は母親の側から娘に対する同一化が起きる」と指摘した。<sup>6)</sup>「いつも」「一緒に」の「仲良し」のスルイヤとアグネスは、母子密着の状態にあり、母は、自己に酷似した娘を「自己の延長」つまりは自己の分身とし、娘のアイデンティティーを自己のそれと同一化していると考えられる。

娘の「希望」を拒否する理由として、スルイヤは以下のように付け加える。「まして自分の夫を奪つた戦場闘士の一員にすることなど……」。飛行家は危険を伴う職業だ。娘の身を案ずるのは母親として反対するのは当然のことである。しかし、それだけではなく、スルイヤにとつては娘の望む職業が「戦場闘士」であることが重大な問題であった。

第一次世界大戦はスルイヤの「夫を奪つた」。一九一四年の「サラエボ事件」を契機に始まった世界規模の帝国戦争の背景には、ドイツ・オーストリア・イタリアの三国同盟とイギリス・フランス・ロシアの三国協商との対立がある。一九一八年、ドイツの降伏によつて終結したが、双方で約六四〇〇万人が動員され、戦死者は約

一〇〇〇万に及ぶ。「陸軍工兵中尉」として出征した夫も「白耳義の戦線」で戦死した。「白耳義の戦線」とは、一九一四年、一〇月に勃発した「イーブルの戦い」を指すと考えられる。イギリス軍を中心とした連合軍とドイツ軍との戦いで、ドイツ軍は協定で禁止されていた毒ガスを使用し、連合軍は二五万人のイギリス兵を含む三〇万余の戦死者を出した。<sup>(7)</sup>開戦当初のイギリスは「ヨーロッパ大陸諸国とちがって、国民に兵役義務はなく」、「大陸での戦闘はフランス・ロシアの陸軍にまかせ、数か月でおわらせるという、楽観的な見通しに支配されていた」<sup>(8)</sup>のだが、すぐに総力戦の体制となり、職業軍人ではなく「機械屋」であったアグネスの父も犠牲となった。戦争終結後も国民の受難は続いた。イギリスは戦勝国であったが、戦前と比べ国際的地位が大きく後退していた。ヨーロッパの購買力の減退、大戦中のアメリカ・日本の発展、植民地における民族運動の高揚と民族資本の成長、自治領の経済的發展等が原因となり、海外市場は狭められ、輸出は伸び悩み、戦争中にアメリカから借りた膨大な負債やロシアに投資していたイギリス資本を回収できなかったこともイギリスの経済を圧迫した。国内では失業問題が最大の問題となった。<sup>(9)</sup>

「夫の戦死以来の悲しい追憶」がスルイヤの胸から消えることはなかった。戦争によって夫だけでなく幸せな生活全てを失った母は、反戦運動に立ち上がる。スルイヤが所属する「新しい進歩主義を奉ずる婦人団体」とは、「大戦当時ですら敢然不戦論を主張し平和論を唱導し」、「大戦終結後は数万の未亡人を加えて英国の一大勢力となつて来た」反戦を掲げる集団である。「陸軍士官」になるという娘の「希望」は、戦争を主導して闘うことを意味する。スルイヤは

「全宇宙に唯一一人の頼りにする者」の娘が夫と同じように戦争で奪われることとともに、「自己の延長」として同一化している娘が、自己の思想と正面から対立する道を歩むこともまた「堪えられない」のであった。

## 二 娘の旅立ち

母の影響が色濃いアグネスが、母の思想に反するような将来を切望することには疑問が生ずる。水田宗子氏は「母性領域」について、「籠」と「繭」という二面性を持つている」と指摘した。母との密着空間は、「自由な飛翔を阻む」「窒息しそうな」「隔離された空間」「籠」であると同時に「停滞でもあれば至福」「保護された空間」(「繭」)であるという。<sup>(10)</sup>かつてのアグネスは居心地の良い母子密着の「繭」の中で生きてきたのだろう。しかし、「十九歳」という来年には成人を迎える年齢に至り、自らの将来を模索し始めた時、母とは異なる自己のアイデンティティを求め、母との未分化一体の「籠」から脱出しようとしたのではないか。娘は自己のアイデンティティを獲得するために母を否定する、いわゆる「母殺し」を試みる。アグネスの採った方法は、反戦を掲げる母に対し、戦闘を率いる「英国陸軍士官」になることだった。母子密着の殻を打ち破り、「母殺し」を達成するには、反戦という母スルイヤのもつ強固な価値観を否定する必要があったのだ。

さらにアグネスの選択には、亡き父の存在が深く関わっていることに留意したい。水田宗子氏は「娘として父のようになりたいと願望したことは、とりもなおさず母への拒否の現れ」とする。母を拒否し、母とは異なる自己として生きたいと願うアグネスは、母では

ないものとしての父を憧憬したのではないか。

アグネスは父親を知らない。父は「生まれた許りのアグネスに類ずりして」出征し、二度と還つてはこなかった。父の記憶のないアグネスは、その幻影ばかりを育てていたに違いない。母スルイヤはもちろん、周囲の人々も自国のために闘って命を落とした戦死者を悪く語ったりはしない。むしろ英雄として称賛するだろう。女学校時代に「女軍観兵式」で「女士官として佩剣を取つて級友を率い」「全校八百の総指揮を鮮やかにやつてのけ」「持つて生まれた統帥力」を発揮した際や、「顧問の現役陸軍士官に賞讃された」際も、「陸軍工兵中尉」だった父を思わずにはいられなかったはずだ。周囲の級友たちもアグネスを「其の父の位の通りアグネス中尉閣下と囃した」。「何か陸軍に関係した勇ましい仕事を見付けたいと望んで」いるアグネスの心の中で、戦死した父親が誇り高き英雄として神聖化されていることは明らかである。「勇ましい」父の幻影を追い続ける娘は、偉大な父のようになりたいと願つたのではないか。

アグネスと母の戦争に対する考え方の溝には、世代間の隔絶や時代の流れも影響している。戦争を体験した母と異なり、アグネスが物心ついた頃には既に終戦を迎えていた。さらに戦後は「遺族恩給で余り贅沢は出来ぬが普通な生活が続けて来た」ので、経済的被害も受けていない。アグネスは戦争に対する恐怖や疑念を抱いていないと考えられる。さらに、アグネスが思春期を迎えた作品内時間の一九三三年は、一九三九年開戦の第二次世界大戦へと世界が確実に向つている只中であつた。一九二二年、イタリアでムッソリーニが首相に就任すると、国内ではファシズム化を推進し始めた。一九二九年に世界恐慌が始まり、ドイツでは一九三三年ヒトラーが政権に

就いた。テクストにも「疑雲のたゞよふ欧州」、「此頃の不安の国際

関係」、「次ぎの欧州大戦」と示されるように、第二次世界大戦が意識され、戦意が高揚される時期だった。アグネスの通う女学校でも「女軍観兵式」が行われ、「現役陸軍士官」が「顧問」になっている。特に「イギリスは女性パイロットの採用に積極的だった」。アグネスが発見した募集記事もその一環であろう。アグネスが憧れる「女でありながら英国陸軍士官」の「アーミー・ジョンソン」は、「光栄」を揚す「全英女子の渴仰的」である。「アーミー・ジョンソン」とは、女性として初めて単独飛行を成功させたイギリス人飛行家エミー・ジョンソンのことで、第二次世界大戦中は輸送機のパイロットとして働いた。彼女は、女性を戦争に動員するためのプロパガンダの役割を果たしていたと考えられる。自己のアイデンティティを求めて、母を否定し「英国陸軍工中尉」の偉大な父の幻影を追うアグネスを、戦争へと突き進む時代の風潮が後押しした。

アグネスは「陸軍に関係した勇ましい仕事」の中でも、飛行家にとりわけ魅力を感じた。女性飛行家の黎明期にあつて、遠く広がる青空へ飛び立つことは自由と希望の象徴だったのではないか。母子密着の〈籠〉からの解放を求めるアグネスにとって、まさに「将来の活路」だったと言えよう。平和な時代であれば、社会へと飛び立ち、自己実現したいというアグネスの願ひには何の問題も生じなかったはずだ。

ところで、アグネスは母の「許可を懇願」するものの、正面から母にぶつかつていくことしない。水田宗子氏は「母と娘はお互いに依存し合いながら、愛情や献身や憐憫や、嫉妬や敵意や嫌悪や恐怖が入り混じる、癒着と離反をくり返して葛藤」すると指摘する。(母

殺し」は愛情と憎しみというアンビバレントな感情を伴うのだ。娘は「No. 1の奥さん」、「深い理解を持つ母親」という活力と慈愛に満ちた偉大な母を尊敬し、「親友」や「姉妹」のように「仲良し」の母を愛してもいる。母からの自立を求めながらも、愛する母を否定し、尊敬する母を乗り越えることは容易ではない。そんな八方塞がり、「いら／＼」するアグネスに好機が訪れた。パリとドイツの友人からの旅の誘いである。母スルイヤも為す術なく「すつかり途方にくれて」いたので、「母娘の感情のもつれを少し離れて冷静な立場から考へさせる余裕を与えるものとして、二人に喜んで迎へられた」。

旅の様子はアグネスの母宛の書簡に綴られる。第一信では、初めての「一人旅」の新鮮さや解放感が表され、続く第二信では「マ、私どうしても陸軍飛行家に志願する」「止めないで頂戴」という母への決意表明がなされた。「せがんで」見学した「フランス空軍の大演習」がアグネスの決意を強固なものにしたのだ。「六百台余の重爆撃機が天地を震撼させて進軍する様」に「英国なんか敵えそうもないような気がし」、「日の没せざる大英帝国を護るに女軍の補助否第一線に立つ必要を痛感し」たとする。自国を滅ばしかねないフランスの脅威に、「勇ましい」父のように、「大英帝国を護る」ため「第一線に立」ちたいと、いよいよヒロイズムを燃え上がらせた。「白耳義に入りましたが夜中で眠つて居たので知らずに通過して仕舞ひました」という感想からは、アグネスが父の戦没地を意識していることが分かる。自分の考えに確信を得たアグネスは「マ、は外国の此の恐ろしい戦闘準備を見ないから呑気で居られる」と母を批判する。

娘の書簡に、母は激しく動揺した。返信は「余程心痛したと見えて取り急いで書いたらしく字も乱れてゐた」。スルイヤは「旅先きで娘がどんな刺激や感銘を受けるかをハラハラ身もやせる程案じて」いる。「いつも」「二緒」で、「自己の延長」として、「性格や傾向」を知り尽くしていたはずの娘が自分の目の届かないところで未知の体験をする。それは本来子どもの成長を促すものなのだが、母子密着の関係にあるスルイヤは娘の親離れを受け入れることができない。母は「隠さないで打ちあけて」と切望する。加えて戦争の問題が絡んでいるので事態はより深刻である。戦争の悲惨さを知らない娘の「機械を操つるのに暴力は不必要」といった早計な判断を「一見したのを直ぐ其の儘受け取らないで」「本然の姿を突き留めて」と諭す。娘を正しい道へと必死で導きこうとする姿は、娘への愛情に溢れている。だが、その直後に、スルイヤは以下のように続ける。「そうでない」とママとあなたは他人のようになってしまふとも知れません」。焦燥に駆られるスルイヤは、娘に戦争の恐ろしさを語るより先に、こんなにあたを愛している母の教えに従わないならば、母娘の縁を断つという脅迫のメッセージを伝えてしまった。スルイヤの言葉は、「母殺し」を試み、愛憎というアンビバレントな感情に引き裂かれているアグネスにとって、大きな抑圧となる。母娘の往復書簡には、両者の葛藤と闘争の様相が表れている。

### 三 語られた戦争

戦争について何も語ろうとはせず、ひたすら反対する母の言葉は、もはや娘には届かなかった。フランスからドイツに渡った後も、アグネスの決意は揺るがない。再び喜び勇んで「ドイツ最新型の尾の

ない飛行機を見に行く」と、母に向って「マ、ー私はどうして斯うも飛行機が好きなんですか。ーマ、が身の痩せる程私の飛行家になるのを恐れて居らつしやるのに」と投げかける。愛する母に同情を寄せつつも、娘の心は大空の彼方に飛び立つという「希望」に占められていた。

アグネスの書簡には、自らの希望以外にも、第一次世界大戦の戦勝国フランスと敗戦国ドイツの落差が描き出されている。当時のドイツは、敗戦の打撃で生産力が戦前の二分の一以下に落ちた上、莫大な賠償金が課せられたので、国民生活は急速に悪化していた。「誰もが不愉快そうな顔」をしており、「街には何だか絶望のやうなものを感じ」たアグネスは「陰惨なベルリンへやつて来た事を後悔」していると吐露する。友人ジャンネットの家族が「寂しい三人暮らし」で、「家が狭くて、貧しく、ジャンネットの兄は無職で「仕事があれば」道路普請の老夫でも働きに出たい」と望んでいることが綴られる。フランスの友人の家が「可なり大きな靴屋」で「愛想のよい御両親」に囲まれていることは対照的である。また、フランスでは「誰でも」「フランスは世界の楽園」と自国を「大自慢」するのに対し、ジャンネットの母は「斯んな国の言葉を憶へたつて役に立たない」と自国を卑下する。アグネスは、戦争の爪痕を目の当たりにし「敗戦国の如何に惨めな事に深く心を打たれ」た。しかし、そのことと自らの望む「英国陸軍士官」の道が地続きであることにまで考えが及びはしない。

ところが、母への最後の書簡において、アグネスがこれまで執拗に主張してきた「陸軍飛行隊」への夢を断念したことが明らかにされる。アグネスの心を動かしたのは、実の母スルイヤではなく、ド

イツ人の友人ジャンネットの母イリデであった。テキストには、イギリス・フランス・ドイツのそれぞれの母娘が登場し、「母と娘」の姿が複眼的に描かれているのだが、ドイツ人の母の語りによって、イギリス人母娘の対立が和解へと導かれる構造になっている。イリデは「自分の考へ」をアグネスに向って「非常に真剣に」伝えた。まずは「あなたのお母様ばかりでなく、全世界の母親は自分の娘が戦争を誘発するやうな女流飛行家になるのを避けるでせう」と明言した。その上で、先の戦争は過ちであったこと、戦中戦後の苦難がどれほどであったかを語って聞かせた。「世界人類の精神的幸福といふ事を考へずに何かしら新しいことを発明しようと猛進し」、「ドイツ人の心の底に広大な温かい人類愛が欠けて居たから」戦争が起きてしまったと嘆き、「あなたのお母様や私共は本当に戦争の惨忍さを、まぎく味は、されたのです。女達は不安と餓死で死にそうでした」と戦時中を振り返った。戦後のイリデは、戦争の後遺症で苦しむ夫の「ウ、ウーと唸る声」を聞きながら、「やつとジャンネットとウキリー（息子―引用者註）の為に生き続けて来」たという。「大変に焦れて居る」様子からも辛苦の日々が窺われる。

スルイヤとイリデは、イギリスとドイツ、戦勝国と敗戦国、と国や立場は異なるが、「惨忍」な戦争によって夫と平穏な生活を奪われた戦争未亡人であることに変わりない。同じ娘をもつ母としても、イリデはスルイヤの気持ちが届きにくいほど理解できたので、アグネスに「あなたのお母様も屹度あなたを頼りに生きておいでに違ひない」と告げるのだ。イリデとスルイヤの共通点は他にもある。イリデの息子は「ナチスの党員になつて」「突撃隊を志願」しようとしていた。子供の戦争参加を止めたい母は「静かな愛を以つて」「国際関係を

朗らかで親しいものにするやう努力しなければならぬ」「正義の爲め、愛の爲め闘ひませう」と涙を流して平和を訴えた。イリデの話聞いていた子供たちは皆「泣き」、息子は「突撃隊志願はもう止めたよ、心配しなくともよい」と「母の肩をさすつ」た。母の世代と娘の世代の戦争に対する考え方の溝が埋まった瞬間であつた。

イリデの語りによつて、戦争の悲劇がアグネスの胸に迫り、イリデにスルイヤを重ねること、「今こそマ、の苦しかつたことを察することが出来ます」と、初めて母の気持ちを理解する。さらに「私はマ、の爲に、イリデ叔母様の爲めにも陸軍飛行隊へなんか習ひに行きません」と宣言するのだ。一見すれば、アグネスの一八〇度の方針転換はあまりに唐突である。しかし、そもそもアグネスの「陸軍飛行隊」志願が、母からの逃走に基づいていたことを考えれば、辻褄が合う。自己のアイデンティティー獲得の爲に、〈母殺し〉を企てた娘の中には、常に「No.1の奥さん」、「娘の性格や傾向に深い理解を持つ母親」という偉大な母親の姿があつた。しかし、同じ戦争未亡人イリデの苦難を聞き、自分がこれまで目にしてきたのは、母のある一つの側面に過ぎなかつたことを悟る。

アグネスは母の弱い部分を知り得る機会がなかつた。娘の書簡を読んだスルイヤは「ドイツの戦死者の未亡人イリデの嘆きに引き入れられて、烈しくむせび泣いた」。「夫の戦死以来の悲しい追憶が次ぎから次ぎへと」、「胸をついて出た」。母は「悲しい追憶」をひたすら胸に仕舞ひ込んできた。娘が「陸軍飛行隊」になると言い出した時でさえ、「胸の悲しみ」がアグネスに語られることはなかつた。母スルイヤの語られなかつた悲痛の声をイリデが代弁した。アグネスは、その悲しみに思いをはせ、スルイヤが強く完璧で偉大な母で

はなく、悲しみや弱さを内包した一人の人間であることを理解したのだ。母の眞の姿を知つた娘は、自分の尊敬していた理想の母の呪縛から解放されたのではないか。イリデの語りは、アグネスが理想化された母を乗り越え、母とは異なる自己のアイデンティティーを獲得する契機となつたのである。

アグネスは書簡で「マ、は何故イリデ叔母様のやうに胸の悲しみを私に打ち明けて下さいませんでしたの」と母に訴える。娘の眞剣な思いを受けたスルイヤにも変化が生じた。「娘が帰つてから改めて語り合はうと心を定めた」のだ。「語り合はう」という決意からは、母もまた母子密着の関係から脱しようとしていることが窺われる。母子密着の関係においては、対等に語り合ふという態度は成立しない。自らの「悲しみ」を「打ち明け」、「語り合」うということとは、一がいにくらはしてはならない。さらにスルイヤは「娘の新しい思想を認めることに他ならない。さらにスルイヤは「娘の新しい思想を」ではなく、改めて向き合おうという心境にまで至っている。密着していた母と娘は、分離し、一対一の個人として向き合ふことができたのだ。また「悲しい」記憶を共有した母と娘は、共に分身として依存し合うやうな密着関係ではなく、互いを心から思いやるやうな母娘の絆を手に入れることができるのではないか。

イリデの語りは、理想の母だけでなく、神格化された父の幻想をも打ち砕く機能を果たす。イリデは「憎むべき戦争！私の夫を斃殺しにしました」と声を荒げた。出征した夫は砲弾で負傷し右脚を切断した。一度は戦地から戻つたが、義足で歩けるようになると再び召集され、今度は毒瓦斯の被害に遭つた。夫は後遺症の喘息で「夜

昼なしの十年間の苦しみ」の末、亡くなったのだ。イリデが語るのは敵国への恨みではない。夫を死に追いやった毒ガスが「敵の毒瓦斯か、味方のものか解らない」と言い、敵味方なく、全ての人々の命を奪う戦争の不毛を説く。イリデの夫もアグネスの父も同じ毒ガスで命を落としている。イリデの「非常に真剣」な反戦のメッセージを受けたアグネスが、戦争を担う軍隊が英雄であると信じ続けるだろうか。

母子密着に陥っていた娘が、自己のアイデンティティーを模索し始めた時、母を否定し、偉大な父のようになろうとした。しかし、それは《母の娘》から《父の娘》になったに過ぎない。敗戦国ドイツの母との邂逅によって、アグネスは母からも父からも解放され、自立した一人の人間としての道を歩み始めたのである。アグネスの一人旅は、母の分身でも父の分身でもない自分を探す旅になった。

### おわりに

本テキストには、母娘が、密着関係から解放され、互いに一人の人間同士として共生するまでの過程が巧みに描き出されている。さらに娘の成長の物語、母の子離れの物語に留まらず、母娘の葛藤に、反戦と戦争協力の思想対立が二重写しにされ、娘の戦争協力の意識が母から解放される同時に反戦へと傾斜していく様が示されている点も評価したい。

かの子の戦争協力はしばしば批判されるところだが、戦争未亡人の母たちだけでなく、語り手までも「全欧州の男性を人殺しの機械にした欧州大戦」と戦争を非難し、戦勝国の母娘が敗戦国の母の助力によって新たな道へと進むという構造をもつ本テキストには、反

戦と平和への希求が底流していると言えよう。

「次ぎの欧州大戦の始まるまで飛行家志願はおあづけに」というアグネスの発言や「新しい時代戦闘準備を完全にして始めて平和の保たれる時代が来て居るやうにも感じられる」という末尾におけるスルイヤの感想など、限界ともとれる箇所も存在し、紅茶を好むイギリス人、おしゃれで葡萄酒を飲むフランス人、大柄でたくましいソーセージ好きなドイツ人といった国民性の描写は、いずれも類型的である。しかし、第一次世界大戦後の戦勝国と敗戦国の落差を描くことで戦争の脅威を示し、女性戦争に巻き込まれていくという現実を暴きつつ、忍び寄る第二次世界大戦への危機感を表明した点は、諸々の限界を補つてもなお、あまりある。本テキストは、実際にヨーロッパの国々に滞在し、戦争を肌で感じたからこそ生みだすことのできた作品として、価値があると考ええる。

最後に、子の親離れと親の子離れのテーマは、代表作『母子叙情』に引き継がれていくと考えられ、文壇デビュー前の習作期に既にそれが表されているということも指摘しておきたい。

### 註

(1) 亀井勝一郎は「欧州旅行中に、岡本美学といふべきものの核心が結晶した」(『滅びの支度』『芸術の運命』実業之日本社 一九四一・二)と述べている。

(2) 実業之日本社 一九三七・三。瀬戸内晴美は「かの子の『小説への試み』がいたるところにちりばめられている」(『かの子療乱』講談社 一九六五・五)と指摘している。

(3) かの子は、ロンドンのハムステッド地区、バリのパツシー地区、ベルリンのシャロットテンブルグ地区に滞在した。



- (4) 『川』（一九三七・五）、「扉の彼方へ」（一九三八・二）、「快走」（一九三八・一二）、「家霊」（一九三九・一）、「娘」（一九三九・二）、「雛妓」（一九三九・五）等で母と娘の交感が描かれている。代表作『母子叙情』（一九三七・三）のせいか、「母と息子」のイメージが強いが、実際は母娘の関係を描くことが多い。
- (5) 主にフランス派フェミニストといわれるリュス・イリガライ、ジュリア・クリステヴァ、エレン・シクスス、モニカ・ヴィティックによってなされた。それまではフロイト学説における父と息子、母と息子、父と娘の関係の重視によって、母と娘の関係は軽視されていた。
- (6) 信田さよ子・上野千鶴子「特集 母と娘の物語 スライム母と墓守娘」（『ユリイカ』二〇〇八・一二）
- (7) 溝川徳二編『最新版 戦争・事変全記録』（名鑑社 一九九一・一二）を参照した。
- (8) 大江一道『世界近現代全史Ⅲ 世界の戦争の時代』（山川出版社 一九九七・七）
- (9) 綿引弘『世界の歴史がわかる本 帝国主義時代～現代編』（三笠書房 二〇〇〇・八）を参照した。
- (10) 「女性の自伝―母性領域への回帰」（『フェミニズムの彼方』講談社 一九九一・三）
- (11) 水田宗子「〈母と娘〉をめぐるフェミニズムの現在」（水田宗子、北田幸恵、長谷川啓編著『母と娘のフェミニズム』田畑書店 一九九六・一一）
- (12) 父が「生まれた許りのアグネスに頼ずりして、白耳義の戦線へ出兵して行つた」のが、一九一四年で、現在アグネスは「十九歳」ということから定めた。
- (13) 佐々木陽子『総力戦と女性兵士』（青弓社 二〇〇一・一）
- (14) 註(11)に同じ。
- (15) 日中戦争勃発後、民族主義や戦争肯定の言説を数多く発表し、傷兵慰問も積極的に行っている。ただし小説において戦争の影が見られるものはほとんどない。
- (16) テクスト発表当時は、十五年戦争下であり、時代の制限から一貫して反戦を提唱することは難しかったと考えられる。
- (17) 詳しくは拙稿「岡本かの子『母子叙情』―母子解放の〈通過儀礼〉―」（『日本女子大学大学院文学研究科紀要』第一六号、二〇一一・二三）を参照されたい。
- 〈付記〉本文の引用は『岡本かの子全集』第一卷（冬樹社 一九七四・九）をテキストとし、引用もそれに拠った。旧字は新字に改めた。